# 改作本『夜寝覚物語』本文校訂覚書

妹尾好信

## はじめに

平安朝物語『夜の寝覚』には、中世に作られた改作本が存在しており、主に原作本の中間と末尾にある欠巻部分の内容推定の資料として重宝されるとともに、改作の方法を検討することで中世における王朝物語享受の一様相を知る手がかりとして利用されている。

改作本は、中村秋香旧蔵の五冊本が故金子武雄氏によって翻刻・紹介されてその全貌が知られた（金子武雄校、古典文庫『夜寝覚物語（異本）』上・下（昭和29・30 古典文庫）。そのため改作本を「中村本」と呼び慣わしているが、本稿では中村秋香旧蔵本をもって中村本と称する。他に、三条家旧蔵本が三冊現存し、巻一と巻三が宮内庁書陵部に、巻二が神宮文庫に所蔵されている。中村本が全巻揃っているのに対し、三条家本は巻三までの残欠本であり、巻一も冒頭の八丁分を欠くことから、中村本が用いられているのである。しかしながら、書写年代は三条家本の方が古く、本文的にも三条家本がまさっている。両本は各面の最初と最後の文字が同じになるように書写されていることからも極めて近い関係にあると見られ、おそらく三条家本は中村本の親本であると考えて差し支えない。したがって、本文を校訂する際には中村本よりも三条家本を優先するのが適当である。

中村本には本文の不審箇所に多くの傍注が施されていて読解の助けになるのだが、三条家本の本文を参照することによって疑問が解消される箇所も少なくない。これらは中村本書写時に生じた誤写と考えられる。三条家本と異同がない箇所はそれ以前に誤写が生じたものと見なされるが、現段階では推測本文による校訂しか方法がない。また、三条家本に欠けている巻四・五と巻一冒頭部分については中村本の本文に頼って読解するしかないわけだが、中村本に傍注が付されていないところにも不審箇所は多々存する。

本稿では、主として三条家本の本文（山岸徳平・鈴木一雄編、古典研究会叢書『夜寝覚物語』（昭和49 汲古書院）の影印による）に拠りつつ、基本的に中村本との間に異同がなく、かつ、中村本の傍注および二種類の翻刻（金子武雄著『物語文学の研究』（昭和49 笠間書院）、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第六巻（平成5 笠間書院））において校訂案が傍記されていない箇所について、誤写の可能性を指摘し校訂案を提示しようとするものである。なお、紙数の都合上、今回は巻一のみを対象範囲とすることにした。対照に用いた原作本は、鈴木一雄校注、新編日本古典文学全集『夜の寝覚』（平成8 小学館）に拠った。引用文に施した傍線や傍点は引用者によるものである。

## 一　「見めことがらのいひしらずうつくしう」

最初に取り上げるのは、三条家本の冒頭欠落部分なので、中村本から引用する。第3丁裏8行目～9行目に、

見めことからのいひしらすうつくしうおはするゆへにや

云々とある。八月十五日の夜、端近くで月を眺めながら箏の琴を弾く中君の様子を描写した箇所である。「見めことから」は、「見め」と「ことがら」を並列したものと思われるが、「ことがら」では意味が通じ難い。ここはおそらく「ことから」ではなく「ひとから」とあるべきところであろう。「人柄」は多く人物の性格を言うが、時に外見の様子を言うこともある。原作本巻一で、大納言に昇進した男君が思い余って中君のもとに進入する場面に、「たそかれのほどの内暗なるに、ただ内に入る気色、人がらの、紛るべくもあらぬを」（99頁）云々とある。これは大納言の姿形を「人がら」と言った例である。したがって、ここは「ひ」を「こ」に誤写したものと見て、

見め・ひとがらのいひしらずうつくしうおはするゆへにや

と校訂したい。

## 二　「ぬしはゆかしくてや、おしいり給ぬ」

次に取り上げるのは、九条で、中君の弾く箏の琴の音を耳にした男君（中納言）が、竹林の中から邸内に侵入する場面である。第11丁表7行目～8行目に、

さうのことのねぬしはゆかしくてやおをしいり給ぬ

とあるのだが、このままでは後半の文意が不通である。この部分、中村本では、

さうのことのねぬしはゆかしくてやおしいり給ぬ

とあって、「を」の字がなく、「は」の字の右に「の」と傍書がある。『鎌倉時代物語集成』（以下、『集成』と略す）の翻刻には「さうのことのねぬしはゆかしくてや、おしいり給ぬ」とあって、傍書を「か」と読んでいるが、「の」がよかろうと思う。金子氏の翻刻では「さうのことのねぬしはゆかしくてや、おしいり給ぬ」とあり、傍書を参考にして「（のカ）」と傍注している。

傍書はともかく、後半の解釈だが、金子氏も『集成』も同様に「ゆかしくてや、おしいり給ぬ」と読点をつけている。すなわち、中納言は箏の琴の音の主を知りたく思ってか、中に押し入りなさった、と解釈しているのである。しかしながら、「押し入る」という強い表現には少々違和感がある。思うに、ここは、「や、おしいり給ぬ」ではなくて、「やおらいり給ぬ」とあるべきところではなかろうか。三条家本は「やおをしいり給ぬ」とあるから、「お」と「を」の間に「ら」が脱落したと見て、もともとの本文は「やおらをしいり給ぬ」であったと推測することも可能であるが、三条家本は「やお」で改行され、「をしいり給ぬ」が次行になっているので、行頭の「を」は書写時に生じた衍字と見なすのが妥当であろう。すなわち、三条家本以前の段階で「ら」を「し」と誤写して「やおしいり給ぬ」の本文が

生じ、三条家本で衍字が発生して「やおをしいり給ぬ」となった、そして中村本では衍字の「を」が省かれて「やおしいり給ぬ」という形になったと考えられるのである。したがって、ここは、

さうのことのね、ぬしはゆかしくて、やおらいり給ぬ

と校訂したい。原作本のこの箇所には「箏の琴は、弾くらむ人ゆかしく心とどまりて、やをら入りたまへれど」（28頁）とあるのが有力な根拠になろう。

なお、中村本には、この箇所の少し後の、男君が中君の部屋に忍び込む場面にも、「のきのかけにそひてやをし（ら歟）入給ふ」（12丁裏3行目～4行目）とある。「し」を見せ消ちにして「ら歟」と傍書するように、ここも「やをら入給ふ」とあるべきところが「ら」を「し」に誤写して「をし入給ふ」の本文になっているのである。ここは三条家本では「のきのかけにそひて入給ふ」とあり、「やをら」と傍書で補入しているので、中村本段階での誤写である。原作本にもやはり、「月影のかたに寄りて、やをら入りたまひにけり」（30頁）とある。

## 三　「いし山のしる人もひきかへて」

先の中納言が中君と契る場面に続く第14丁裏2行目～4行目に、

いたつらにいし山のしる人もひきかへてへんのせうしやうにさため給ふかうらめしさに

云々という記事がある。中君を但馬守の三君と誤認している中納言が、三君と石山で出会った宮の中将のふりをして、帰り際に対の君に向かって、石山での契りを違えて三君が弁少将と結婚することになったことを恨んで見せているところである。

宮の中将は三君と石山で知り合いになったのだから「いし山のしる人」でもよさそうに見えるが、「いし山のしる人」という表現はどうも落ち着かない。おそらく「しる人」は、本来「しるべ」とあったのが誤写されたのであろうと思う。「いし山のしるべ」なら、石山の道案内、すなわち石山観音のお導きの意となり、そのような仏の結んでくれた縁に背いて但馬守が三君と弁少将の縁談を進めていることを恨んだ表現としてスムーズに解されるのである。連綿で「へ」と「人」が紛らわしく記されるのはよくあることである。ちなみに原作本では、この箇所は「石山の御伝へをひき違へ、弁少将に定まりたまふが恨めしさに」（34頁）とある。

## 四　「なにのうれしさにかつくろひしたてもあらん」

正月一日、大君方の花やかさをよそに、病に臥し沈む中君のところでは晴れ着を着る気にもなれないでいる。そんな様子を、

ねうはうたちもなにのうれしさにかつくろひしたてもあらん

と表現している（第38丁裏1行目～2行目）。「つくろひしたても」の部分、中村本も同じだが、このままでは「つくろひ」「したて」はともに名詞で並列されていることになる。しかしそれは不自然で、「なにのうれしさにか」との続きからは「つくろひしたて」は動詞であるべきである。すると、下の「もあらん」と自然に接続するために

は、「つくろひしたてゝ」と踊り字を補う必要がある。したがって、ここは踊り字の脱落と見て、

ねうばうたちも、なにのうれしさにか、つくろひしたてゝもあらん

と校訂したい。いったい何が嬉しくて着飾り整えていられようか、の意である。もっとも、「し」を衍字と見て、「つくろひたてゝもあらん」とするとなお自然な表現になるが、そこまで校訂する必要はあるまい。

## 五　「あさましといかりの給てもものの給はず」

中君と姉大君の夫である男君との仲が噂になり、嫉妬にかられた大君から苦渋の胸の内を訴えられた兄左衛門督が広沢に隠棲する父入道に中君のことをあしざまに報告する場面である。左衛門督の話を聞いた入道の反応として、第78丁裏10行目～第79丁表1行目に、

あさましといかりの給てもものの給はずしばらくありて

云々と記されている。中君が姉の夫と情を通じているという衝撃的な話を聞かされた入道は怒って「あさまし」とおっしゃったきり絶句して何もおっしゃらなかったというのである。左衛門督の話は多分に中君方に対する悪意を含んだものであったから、それに乗せられて温厚な入道も思わず怒りを露わにしたということなのであろうが、その後「しばらくありて」口にした言葉からは困惑ととまどいは感じられても怒りの感情は感じられない。しばらくものを言わなかった間に怒りの感情を鎮めたのであろうか。

原作本には入道が怒りを含んだ言葉を発する記述は見られず、ここは改作本独自の入道の人物像が感じられる場面である。しかしながら、「いかりの給」という表現はどこか落ち着かない。誤写がある可能性を考えたくなる。そこで、原作本の該当部分の記事を子細に眺めてみると、次のようにある。

……聞きたまふ心地、世のつねならず、あさまし。とばかり、もののたまはず、御気色うち変はりて（178～179頁）

左衛門督の話を聞いた入道が「あさまし」と思ったという点は改作本と同じである。そして「とばかり、もののたまはず」とあるのも、改作本の「ものの給はずしばらくありて」という記述と合致している。続く「御気色うち変はりて」というのは、怒りのために顔色が変わったともとれるが、そうではなくて「新編日本古典文学全集」本の頭注に言うように「顔色が青ざめる」ことで、ショックのせいで顔面蒼白になったさまを言うととるべきである。やはり原作本では入道は怒ってはいないのである。

そこで気になるのが二重傍線部「とばかり」の語である。これを参考にすると、改作本の「といかりの給て」は「とはかりの給て」の誤写ではないかと思われてくる。三条家本も中村本もはっきり「いかり」と書かれているが、「ハ」の字と「い」の字が紛らわしいのは写本の常である。そうなると、ここは、

「あさまし」とばかりの給てものもの給はず。しばらくありてと校訂されることになる。原作本の「とばかり」はしばらくの間の意であり、改作本の「とばかり」は、とだけという限定を表す用法で意味は異なるが、改作本の作者は原作本にある「とばかり」の語を用いつつ意味を転用したのであろう。したがって、改作本でも実は入道は怒ってはいないのである。たとえ中君に落度があったとしても、入道には溺愛する中君に怒りの感情を抱くということは考えられないことだったであろう。

## 六　「心のいけにくるゝ心ちして」

前項に続く場面で、左衛門督の話を聞いた後の入道の心境を記述した箇所（第79丁裏10行目～80丁表2行目）に、

この事きゝ給てのちはうたかひなきはちすの御ねかひも心のいけにくるゝ心ちしておほししつみたるに

云々とある。この左衛門督の話をお聞きになって後は、入道はそれまで疑いなかった極楽の蓮台の上に往生するという御本願も心の池にくれてしまう気持ちがして思い沈んでいらっしゃるのに、という意であろうが、「心の池」が引っかかる。上の「うたがひなきはちすの御ねがひ」という表現から「蓮」の縁で「池」の語が用いられているのだろうとは察することができる。また、「心の池」という表現は、用例は少ないものの歌語として存在する。『後撰集』巻十一・恋三・七九一に、

を山田のなはしろ水はたえぬとも心の池のいひははなたじ

とある詠み人知らず歌が初例であり、「蓮」との連想で用いられた例としては、かなり時代が下るが、細川幽斎の『衆妙集』六六二に、

法のはなさらにひらくる蓮こそ心の池の根ざしなりけれ

という歌がある。和歌の用例以外に、謡曲「実盛」にも「埋れ木の人知れぬ身と沈めども、心の池の言ひがたき、修羅の苦患の数々を、浮べて賜ばせ給へとよ」とあることが知られている。改作本の作者もこれらの用例を背景に「心の池」の語を使用したのだと考えることはできる。

しかしながら、気になるのは「心のいけにくるゝ心ちして」とある、「くるゝ」との接続の不自然さである。「心の池のいひ（樋＝言ひ）ははなたじ」とか「心の池の根ざしなりけれ」などはごく自然に繋がっているが、「くるゝ」は「暮るゝ」または「暗るゝ」で、暗くなる意であろうから、池との連想関係が弱いのである。そこで、「心の池」が誤写である可能性を考えると、「くるゝ」に自然に連想が働く語として「心の闇」という慣用表現が思い起こされる。

言うまでもなく、「心の闇」は、『後撰集』巻十五・雑一・一一〇二に載る藤原兼輔の歌、

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

を典拠として広く用いられた歌語で、子を愛するあまりに惑う親の心を表現したものである。これをあてはめると、「心のやみにくるゝ心ちして」で、子を思う親心で目の前が真っ暗になる気持ちがして、

の意となり、最愛の娘中君の醜聞を耳にしたために父入道の心が激しく惑っているさまを表すのにまことにふさわしいのである。

原作本を見ると、該当箇所は、

このこと聞きて後は、わりなく、おぼし澄ます蓮の上の御顔ひも、さしおかれ、起き臥し乱れて（180頁）

とあって、同じような行文であるが「心の池」にあたる語はない。ところが、その直前に、

かの御身より、いと恨めしきぞ、あはれなる御心の闇なるや。（同頁）

という記述があるのである。左衛門督の話を聞いて父入道は、スキャンダルを起こした中君自身よりもそれを吹聴する左衛門督の方を恨めしく思ったのであって、それはまことにいたわしい「心の闇」であることよ、と入道の盲目的な親心を批評した草子地である。これから考えるに、改作本の作者はこの「心の闇」の語を続く部分の記述に使用したのであった。したがって、ここは、

この事きゝ給てのちは、うたがひなきはちすの御ねがひも、心のやみにくるゝ心ちして、おぼししづみたるに

と校訂するのが適当と考えられる。「やみ」から「いけ」への誤写は三条家本以前に、「蓮」と「池」の連想によって生じたのであろう。

## おわりに

近年の中世王朝物語研究の気運の高まりとともに、改作本『夜寝覚物語』も、単なる原作本『夜の寝覚』の欠巻部分推定の資料としてではなく、ひとつの独立した物語作品として読まれ、研究されて、文学史上に意義づけられるようになりつつある。

しかしながら、その本文の状況はと言うと、はなはだ心もとないものがある。冒頭部分と巻四・五を欠くものの、室町末期頃の書写とされ、唯一の完本である中村本よりも優れている三条家本においても相当数の誤写や不審箇所が存在する。中村本においてはさらに多く、明治期に所蔵者の中村秋香が付したとおぼしき傍注を頼りに読んでいるのが現状であるが、早いうちに、三条家本と中村本の本文を丹念につき合わせ、校合によって不審が解消しない箇所については慎重な本文批判を行なった上で推測本文を立てるなどして、信頼できる校訂本文を作り上げる必要があろうと考える。

本稿はそのためのあまりにささやかな試みではあるが、改作本『夜寝覚物語』の本文研究の一助となるところがあればと思って提示した次第である。

※中村本『夜寝覚物語』本文の引用は、同本を金子家から寄託されている国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムに拠った。複写を許可していただいた国文学研究資料館に記して御礼申し上げます。また、『後撰集』は『新編国歌大観』第一巻（昭和58 角川書店）に、謡曲「実盛」は「新編日本古典文学全集」『謡曲集①』（平成9 小学館）にそれぞれ拠った。

――せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教授――